春のとき

星空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
春のとき

【Ｎコード】
Ｎ０３０３Ａ

【作者名】
星空

【あらすじ】
それぞれ幸せな家庭を持つ信彦と諒子が、あるとき運命的な出会いをしてしまう。お互いの生活を大切にしながらも、惹かれあう二人の微妙な心の動きを描いた、大人の純愛小説。

第一話　出逢い

いつかはこんな関係終わりにしなくちゃいけない・・いつもそう思ってた。でも、自分の心がよくわからなくなる。どんなに忘れようとしても、目を閉じるとすぐに、彼の顔が浮かぶ。忘れる事なんて絶対にできない。

仲川信彦という男性。いったい彼がどういう男なのか、諒子は何も知らない。ただ、彼の清潔な瞳に、いつの間にか一目惚れをしてしまっていた。もう彼から目が離せない。あの日喫茶店で、コーヒーの味もわからないほど彼を見つめていた。そんな出逢いだった。あれからもう1年半が経つというのに、いまだに諒子の心の中には出逢った時の光景が鮮明によみがえってくる。

信彦の運転するきれいな水色のジャガーは、今日も駅のロータリーで停車し、諒子を待っていた。「ごめんなさい、待った？」「いいや、今来たところだよ」・・・（嘘。いつもあなたは私を待っているの。私より早く来て、待っていてくれる。あなたは私を好きなのよ、きっと。とても好きなんだわ。）諒子の心は優越感に浸る。

「どこに行きますか？」微笑みながら尋ねる彼の横顔に、諒子は見とれてしまう。「海を見に行こうか・・・」諒子がまだろくに考えてもいなくて、ちゃんと返事もしていないのに、彼は勝手に行き先を決めてお気に入りのジャガーを走らせる。（どうせ最初から行き先を決めていたのね。私を喜ばそうと思って？ね、そうでしょ？まるでお姫様のようだわ、こんなに幸せでいいのかしら）すべてを彼に委ねて、ただ諒子はカー・ステレオから流れる音楽に耳を傾けていた。今日も、彼女の好きなＡＯＲが流れている。そんな信彦のさりげない優しさが、諒子の心をまたもや捉えて離さなかった。

第2話　砂時計（前書き）

信彦と諒子の素敵な「春のとき」をお楽しみください。

第2話　砂時計

日々の生活に追われ、夫と子供の世話に明け暮れていた諒子にとって、信彦とのデートはいつもいつも夢のようだった。ちょっとだけでよかった。現実から離れ、夢を見られるのなら、ほんのちょっとだけで諒子は満足だった。彼女にとって信彦は、完全に『白馬に乗った王子様』だった。そしてきっと信彦にとっても、諒子は日常を離れたお姫様のような存在だったのかもしれない。彼女の嬉しそうな笑顔を見るたびに、信彦は幸せを実感していた。車のドアを開けてやり、紳士らしく振舞い、諒子をエスコートしながら、本当の自分はこんなにも女性に優しいのだ、と心の中で自分を見直すのだった。

二人で過ごす時間は、あまりにもはかなくて、短いものだった。それはまるで、砂時計を逆さにしているみたいにはかない時間だった。それでも諒子は信彦の車の助手席に乗りこむ瞬間、自分を見失いそうになるくらいに心が躍った。

信彦は、そんな諒子を優しい笑顔で迎え入れた。そして、諒子の笑顔のために用意してきたＣＤを、誇らしげにそしてちょっと不安げに、カーステレオに入れる。大体は諒子にとってそれが、ちょっと贅沢なデザートを目の前に出された時のような驚きだったし、想像以上の喜びをもたらしてくれるものだった。最初のデートはスティーリー・ダン、２度目がラリーカールトン、そして３度目がデビット・フォスター・・・「ねえ、あなたはどうして私の好きな音楽を知っているの？」「・・？さあ？・・」照れたように信彦が笑うと、諒子も「フフッ！」と肩をすぼめて笑った。「まるでＣＤ屋さんね」「ＣＤレンタルでも始めましょうか？」「それもいいわね」・・・そんな会話を交わしている二人にとって、時間はまるで止まっているかのように感じられた。でも実際には、砂時計の砂がちょっぴり悲しい音を立てながらどんどん下に落ちていく。

素敵な車と素敵な音楽、そして、素敵な恋人。ただそれだけで他には何もない。ただ、静かで穏やかな春の空気が、水色のジャガーと、サラサラとしてとどまることを知らない砂時計の中の二人を、そっと優しく包んでいた。

第3話　それぞれの日常・・（前書き）

二人はなぜ出逢ったのでしょう。何がそうさせたのでしょう。彼らは自分の家族をとても愛しているし、とても大切にしています。それなのになぜ・・・？

第3話　それぞれの日常・・

信彦の妻、美奈子は、銀座のクラブでホステスをしていた。昼になると、モデルさんのようなちょっと濃い目の化粧をして、ブランド物のスーツできれいに着飾り、生き生きと仕事に出かけていく。もちろん、サラリーマンである夫の信彦は、もうすでに会社に出勤してしまった後だ。そして彼女が帰宅するのはいつも翌日の明け方。仕事で疲れきった信彦が、その時間に起きていることなどほとんどない。生活のリズムは完全にすれ違っている。お互いの顔を見ることができるのは、信彦の出勤前の朝6時、寝入ったばかりの美奈子が、どうにか信彦の起きぬけの顔を見つけては、おはよう、だの、おやすみ、だのと、いつもなんだかよくわからない挨拶を交わすのが精一杯だった。ただ、いつだって美奈子は、夫の信彦を愛おしいと思っていたし、どんなに寝ぼけ眼であっても、信彦を見つけた時は必ず、彼の首に腕を回しそっとキスすることを忘れなかった。信彦も、疲れた顔で横たわっているベッドの中の愛する妻に、「行ってくるよ」の言葉と、微笑みを忘れなかった。だとしても、当然のごとく、ベッドを共にすることなど、もう久しく無いに等しかった。それでも、子供のいない彼らは、お互いの仕事を尊重しながら、なんとかうまくやっていたほうだった。ちょっとわがままで明るくチャーミングな美奈子を、信彦はいつもかわいいと思っていたし、愛してもいた。そして美奈子のほうも、誠実な信彦を愛し、信じきっていた。だから美奈子は、信彦と先妻との間に13歳になる娘がいて、時々3人で会いに行くことも広い心で許せた。信彦のほうも、そんな美奈子の優しさに感謝をしていた。二人は深いところでしっかりと結びついていた。誰の手にも壊すことのできない深い愛で・・・。

しかし、そんな美奈子の深い愛を、時々信彦は重荷に感じた。精神的な愛のその奥のほうで、いつも何かを渇望していた。安心しき

った愛。信頼しきった愛。何も変わらない幸せの日常。その中で信彦は、とても大切な何かが自分には欠けている気がしていた。そして、この平穏な日常に完全に埋もれてしまっているどうしようもない寂しさに耐えかねていた。体と心の奥のどこかで、男としての自尊心のようなものが、押さえ切れなくなっていた。信彦は、彼を取り巻く複雑な周囲の人間関係の中で、すべてにほぼ完璧に立ち回り、その振る舞いには、全くといっていいほど非の打ち所がなかった。それだけに、人知れず心の安らぎを必要としていたのかもしれない。

諒子と出逢ったのはそんな時だった。諒子は、美奈子とはまったくタイプの違う女性だった。少し影があり、とても無口で控えめな女性だった。その素顔に近い薄化粧は、きれいな顔立ちをさらに引き立てていた。一瞬にして信彦は諒子を欲しいと思った。でも、そうするにはあまりにも美し過ぎる彼女だった。手も触れてはいけないような、そんな雰囲気を持つ女性だった。そのミステリアスさが、余計に信彦の心をそそった。しかし、もう今すぐにでも自分のものにしたい、この手の中に抱きしめたい、と強く思う心とは裏腹に、信彦は諒子を最も大切に扱わなければならないと自分に言い聞かせていた。優しく涼やかな笑顔を見るだけ、ただそれだけで幸せだった。二人が共有できる時間はとても短い。それでも、諒子と過ごす夢のようなときが、信彦の少し疲れた心と体に十分すぎるほどの安らぎを与えてくれた。

信彦は諒子への気持ちを素直に正直に表した。『君のことは一生大切にするよ、諒子。死ぬまでずっと一緒にいよう。離れるときはどちらかが天国に行く時だよ・・』彼女に対してはそんな言葉も自然に言えた。もうすでに諒子は、信彦の生活の一部になっていた。信彦にとって彼女を失うことは、全くといっていいほど考えられなくなっていた。

いつも二人は、信彦の運転するきれいな水色のジャガーの車中で過ごした。誰にも邪魔されない空間。心が解き放たれる空間。車窓からの景色が少しずつ後方に流れていくと同時に、ゆっくりと優し

く短い時間が流れていくのだった。そしていつしか終着点は、諒子の家の最寄駅だった。どんなにいやだと思っても、楽しい時間には必ず終わりがきてしまう。別れ際の諒子は、いつも悲しい目をした。大きくて黒い瞳からは、今にも涙があふれそうだったが、どうにか泣くのをこらえていた。二人の大切な時間を台無しにしたくなかったからだ。信彦はそんな諒子を愛おしかった。でも、二人の良心は、それぞれを別々に、自然と自分たちの現実の家庭へと向かわせていく。お互いの心と体は無情にも引き裂かれていく。仕方の無いことだった。それに彼らの場合、二人とも今の生活を壊そうなどという思いはこれっぽっちも持っていなかった。大人だった。そこまで分別の無い二人ではなかった。信彦が美奈子を愛するように、諒子も夫と子供を愛していた。そしてその愛は、諒子の大きな自信に溢れていた。

第４話　それぞれの日常・・

諒子は夫を愛しすぎていた。愛しすぎるがゆえに、夫を無意識のうちに束縛してしまうのだった。それは未熟な愛なのかもしれない。それとも、ひょっとしたら夫に愛されていないのだろうか・・彼女はそんなふうに思ったりもした。愛イコール束縛・・・諒子は夫のまなざしをもっと自分に向けていて欲しかった。妻としてだけではなく、恋人としても見て欲しかった。あるいは、愛人として・・・。

仕事帰りの夫は、よくクラブやスナックに立ち寄る。それは、世の男たちがそうするように、ごく自然のことだった。でも嫉妬深い諒子にとっては、それは簡単に理解できるものではなかった。自分以外の女性を相手に酒を飲み、日ごろの鬱憤をはらしているのかと思うと、それだけで嫌な気持ちがした。ただでも、夫の心を捉えている別の女性がいる、と、勝手に思い込んで、諒子が作り上げた架空の女性に嫉妬するような、そんな諒子だった。それなのに、現実に夫の目の前には、きれいに化粧をし、派手に着飾った女性がいる。男を誘うような目で見ている魅力的な女性がいるのだ。いや、男を誘うような目をして、というのではなくても、実際にとても魅力的で、夫はごく自然に心を奪われているのかもしれない・・・。そんなことを想像しては、なんの魅力もない自分と比較をして、力の抜けた深いため息をつくのだった。夫には、いつも自分だけを見ていてほしかった。人一倍嫉妬深く、独占欲が強かった。そんな自分を認めるたびに、諒子は自己嫌悪に陥っていくのだった。この自分の気持ちを、何とかしたい・・。どうしてこんなに私は夫を好きなのだろう。どうしてこの私の気持ちに夫は応えてくれないのだろう。夫に言わせれば、『お前は世界一幸せなはず』なのだそうだ。だったらなぜ、私を優しく抱きとめてくれないのだろう。私は夫の優しい腕に抱かれて、幸せな夜を過ごしていたいのに。私にはもう女性としての魅力が無いのだろうか・・・。まるで出口の無いトンネル

の中にいるみたいに、いろんな考えが頭の中をぐるぐる回りながら、いつも夫の安らかな寝顔を見つめているだけの諒子だった。

夫は諒子を愛していた。信じきっていたし、誰よりも大切に思っていた。諒子の家庭の中には、誰から見ても羨ましいくらいに幸せで安心感のある風が吹いていた。それは諒子にもわかっていたし、夫の子供への大きな愛情にも、諒子は心の底から感謝していた。そうかもしれない。夫が言うように自分は世界一幸せなのかもしれない。でも、何かが足りない。それが何なのか、諒子にもわからなかった。信彦と出会うまでは・・・。

第5話　めまい

車の窓を開けると、まだ外の風は冷たかった。二人の待ち望んでいる春にはほど遠かった。「ね、聞こえた？」「なに？」「雲雀の声・・・」「え？雲雀？」「そう、雲雀がいるんだ、もう春だね・・・」諒子は嬉しそうな信彦の横顔を見つめた。住宅街を抜け、細い路地に入っていくと、そこは行き止まりになっていた。造成地のように見えたが、まだ工事された形跡はなく、ほとんどが枯れ木の林だった。（雲雀の声、か・・なんだか懐かしいな）諒子は今日も思った。この人といると、なんて心が温まるのだろう。心の隅っこのほうに、不思議とゆるやかな振動を感じる。体の中を、暖かい電流がそっとそっと流れていくみたいだ。

思わず諒子は、信彦の左の掌を右手の指でそっと触れていた。信彦はじっとして動かなかった。動かなかったのではなく、動けなかった。（自分の中にもこんな感情がまだ残っていたのか）今年の４月で４２歳になる彼は、まるで１８歳か１９歳の頃に逆戻りしたように、恥ずかしくなるほど新鮮な胸の高鳴りを感じていた。「大きい手ね、それに、とても暖かい」諒子が嬉しそうにつぶやくと、信彦は優しく微笑みながら、諒子の冷たい右手をぎゅっと握り返した。諒子も胸の奥がずきんとした。「大きな手だから、私の手がすっぽりと入っちゃう・・・だんだん温かくなってくるわ」そう言いながら、諒子は心までもがとても温かくなってくるのを感じた。大きな信彦の手が逞しく感じられ、諒子の心はもう完全に動けなくなった。

信彦は諒子の右手をそっと撫でながら「細い指だね・・」とつぶやいた。（繋いだその手をきっと離さないでほしい）そう願いながら、諒子は信彦を見つめた。早春の陽光が木漏れ日となって車窓から差し込んでくる。それはとても安らかで静かで、かけがえのない二人だけの時間を優しくそっと包み込んでいた。

どのくらい時間が過ぎたのだろうか。時計をチラッと見た信彦は、

左手で諒子の右手を握ったまま、右手で車のキーを回しエンジンをかけた。もう彼が仕事に戻らなくてはいけない時間だった。信彦は黙ったまま諒子を見つめ、彼女の右手にそっと口づけをすると、車を、静かにゆっくりと加速させた。諒子は嬉しすぎてめまいすら感じた。

第6話　シャボン玉

『ごめん、今夜は奥さん仕事休んだらしいんだ。少しの時間でいいかな？』こんなことはよくあること。彼はいつも奥さんが一番・・。大きく息を吸い込む。『デートはまた今度にしましょ。私にまで気を使ったら疲れてしまうわよ』『ありがとう、諒子、君は大人だね、惚れ直しちゃうよ・・・』こんなメールのやり取りの後は、背伸びをした分とても疲れる。奥さんが・・・という理由ではなくて、別の理由をつけてくれたほうがましだった。大人なんかじゃない、嫌われたくなくて背伸びをしただけ・・・。こんな私の気持ちには、全然気づいてないんだろうな。忙しい時間の合間でやっと約束できたというのに、いとも簡単にキャンセルになる。

それでもすぐ次の瞬間、何事もなかったかのように私はまた普通の生活に戻っていく。夫がいて子供がいて。いつの間にかスイッチの切り替えが上手になった。

『ごめんなさい、子供がちょっと熱があるの。せっかく約束したのに・・。また今度にしましょう』『わかった、残念だけど、またね。熱があるときは子供にとってママが一番だよ』『やさしさありがとう、ごめんね』また子供か・・。でも仕方ないんだ、それが現実。諒子には幸せを壊してほしくない。いつだってまた逢えるんだから・・・信彦もすぐに現実の生活にスイッチを切り替える。大人だから・・？そうだ。そう表現するのが正しいのかも知れない。

それぞれの生活を理解しあう二人。どんどん先に約束を送っていく。嘆いたり悲しんだりできない。自分たちの思いのままに時間をとめておくことができない関係。二人とも大人だ。いえ、大人のふりをしなければ、続けてはいけない関係。だからせつない。

『線』ではなく『点』で繋がる二人。その部分だけが切り取られて、きれいな写真のように丁寧に思い出としてしまい込まれる。そしてその思い出は、誰の目にも触れられず、永久に二人の心の奥底

に閉じ込められる。そこには希望などという言葉もなければ、誰からの祝福などもない。ただあるのは、二人の思いの深さだけ。信じられるものは、目に見えない二人の心だけ。壊れやすくてはかなくて、現実であり、現実でない。それはまるで、やっと膨らんだかと思うとすぐに消えてしまうシャボン玉のようだった。それも信彦と諒子の二人だけにしか見えない、とても小さくてとても美しいシャボン玉。でも、どんなにせつなくても、それ以上は望まなかった。無理をすると何かが壊れてしまうということを、お互いによく知りえていたのだ。

第7話　夜の桜

「暖かくなったらまた海を見に行こうか。」「ええ、そうね。」春が待ち遠しかった。二人とも季節の中では春が一番好きだった。花や鳥や木などの自然が好きなのも、一緒に過ごしていて安心できる理由だった。信彦が４３歳になる翌月の５月、諒子は４１歳の誕生日を迎える。春が好きなのは、きっと二人とも春生まれだからかもしれない。そう思うことがごく自然なことで、つまり、二人が出逢ったこともごく自然のことのように思えた。二人でいるとよく、ずっと昔から一緒にいたような錯覚を起こした。前世は兄妹だったのかもしれない。恋人や夫婦であるというよりも、血の繋がりを感じるような近い関係のような気がしていた。

決算期の３月は信彦の仕事が忙しく、二人は逢うことがなかなかできなかった。諒子は少し焦っていた。なぜなら、もうあちらこちらで開き始めた桜の花が、散ってしまいそうだったからだ。電車の窓からも、散り始めた満開の桜の花をよく眺めてはため息をついた。同時に、待つだけの身というのも結構辛いと感じていた。でもそんな気持ちを決して信彦には感じさせたくなかった。

諒子のあまり当たらない勘が、その日はたまたま当たったようだった。『今夜８時、桜を見に行こう・・・』メールを見た瞬間、諒子の胸は高鳴った。もう一ヶ月以上も逢っていなかった。金曜日の夜。やっと逢える。

諒子はいつものように、コーヒーショップで二人の好きなカプチーノをテイク・アウトした。信彦用に砂糖を一つ多くもらった。待ち合わせの８時まであと５分。そのとき携帯電話が鳴った。「もう少しで着くよ。ごめんね、待たせて」と優しい信彦の声が電話の向こうで聞こえた。彼はいつも紳士だった。時間に遅れたことは、よほど道路が渋滞している時以外にはない。まして連絡なしで遅れることなどまずない。（だから仕事もうまくいくのね。家庭もうまく

いくのよ・・。）諒子はいつも感心していたし、そんな信彦に憧れていた。

いつものように水色のジャガーが諒子のそばを通り過ぎて静かに停まった。緊張しながら諒子は助手席に乗り込む。何度逢っても心臓がドキドキした。「元気だった？」「はい、とても。あなたは？」「僕も元気だったよ。なかなか逢えなくてごめんね。よく我慢してくれたね」諒子の頭の中は幸せ過ぎて空っぽになった。逢いたい私の気持ちは通じていた。彼も私に逢いたいと思ってくれていた。その瞬間、一ヶ月以上もの空白はもう簡単に埋まってしまったみたいな気がした。

信彦は車をどんどん走らせた。左手でずっと諒子の右手を握っていた。いつものように彼の優しさと温もりが伝わってくる。３０分ほど走ると、桜並木のトンネルに着いた。どの木を見てもほぼ満開だった。暗くて静かだった。沿道に車を停めると、信彦が言った。「ここは桜の名所なんだ。この先は霊園だから静かだよ」確かに誰もいなかった。最近の夜桜名所は、人工的によくライトアップされていることが多いが、その場所は本当に暗かった。ただ美しい桜の花だけが、月の光で白っぽく浮かび上がっていた。幻想的だった。それは諒子が、生まれて初めて目にする光景だった。もう言葉が出なかった。暗い空が、白い桜の花でうっすらと明るくなっているように見えた。でもそれは目の錯覚。ぼやけた月の光が、二人の頭上に差し込んでくる。シートを倒して、サン・ルーフを開け、見上げた空は、一面の桜の花、花、花・・時折吹いてくる優しい春の風はまだ冷たく、幻想的な桜の花びらを雪のように散らしていく。桜の中に自分が落ちていくような錯覚・・「なんだか私、桜の花になりたくなってきたわ」諒子がそういうと、信彦は静かに笑った。「本当にきれいだ」「ええ、きれいね、とても・・」二人はほとんど言葉を失ってしまっていた。諒子はこの感激は一生忘れないと思った。たとえ、信彦がなんらかの理由で自分の前から姿を消したそのときでも、この桜の中の二人のことは、決して消えないと思った。（思

い出をありがとう・・・）諒子は信彦に心の中で感謝をした。きっとこの桜はもう何日ももたないはず。無常にもどんどん散っていってしまうだろう。だから美しいのかもしれない。そのはかなさゆえに、桜の花は多くの人の心を捉えるのかもしれない。はかなくてせつない桜の花。まるで、二人のようだと思った。嬉しすぎて涙が出そうだった。

シートを戻して、諒子は信彦を見つめた。きれいな顔立ちの彼を急に見たくなったのだ。右手で彼の頬をそっと撫でた。諒子は彼のすべてを全部自分のものにしたくてたまらなかった。このままずっとそばにおいておきたかった。愛おしくて仕方がなかった。信彦は起き上がると「諒子、好きだよ・・」と言いながら優しく諒子の唇に自分の唇を重ねた。そしてそっと抱き寄せた。信彦も諒子をほしかった。この腕の中にずっと抱きしめていたかった。二人とも同じ思いだった。二人は同じくらい愛し合っていた。何度も何度もキスを交わした。

あとどのくらいの時間一緒にいられるのだろう。1時間？それとも３０分？時計の針を完全に止めてしまいたかった。諒子を腕に抱き、この上ない喜びに包まれながらも、信彦は心のどこかで時間を気にしていた。彼は諒子に決して無理をさせない。別れることが怖かったから。何があっても諒子を失いたくなかった。でも諒子は違った。たとえ夫にばれて、別れなければならないようなことになったとしてもいい。そのくらい信彦と離れたくなかった。そう思いながら信彦の大きな胸に身体を預けた。泣きたいくらい大好きだった。（いっそすべてを捨てて、今この桜の花々の下で、一緒に死んでしまいたい）しかしそんな願いは叶うはずもなかった。

信彦は、そっと諒子の両腕をつかみ、二人の身体を引き離すと、もう一度彼女に口づけをして、静かに車のエンジンをかけた。信彦は何も言わなかった。諒子も黙って窓の外に目をやった。時計の針は、もうまもなく１０時をさしていた。カーステレオから流れる静かなスムース・ジャズのピアノの音色で、静まり返った車の中の二

人は、徐々に現実に連れ戻されていく。

「今度いつ逢える？」「そうだな、また明日！」「うん、そうしようね！」絶対にありえない約束をしながら、二人は笑った。諒子はまた信彦の左手ににそっと触れた。信彦は少し強い力で握り返した。そんなさりげない優しさが諒子は大好きだった。信彦は少し遠回りをして長い長い桜のトンネルをわざと往復して通った。いつも信彦は諒子を喜ばせたかった。「きれいね、とても！今日はきっと眠れないかもしれない！」諒子は歓声を上げて喜んだ。とても素敵な夜だった。幻想的な夜の桜と少し冷たい春の空気の感覚が、その夜はずっといつまでも、それぞれの日常に戻った二人の心をしっかりと捕らえて離さなかった。

第8話　春のとき

朝6時、今日も諒子は家族のために朝ごはんの準備を始める。自分のためにコーヒーを淹れ、お気に入りのC．Dをかけて。今朝の音楽は、マイケル・フランクス。信彦からのプレゼントだ。食事が終わると、子供を学校に、夫を会社に送り出す。幸せの日常はこうして始まる。何も変わらない日常。でも、ラジカセから聴こえてくる信彦の優しさが、諒子を優しくする。「なんだか今日機嫌がよくない？」夫が聞くと「あら、そう？」とさらっと答える。諒子の笑顔は夫を幸せな気分にする。（これでおあいこね）諒子はいつの間にか夫のスナック通いも許せるようになっていた。

「ありがとう！うれしいな」ペンダントを首にかけてもらいながら、美奈子は上機嫌だ。昨日ティファニーで購入したハートのペンダント。諒子の誕生日に贈ったものと、少しデザインの違うものだ。信彦が妻の美奈子に贈り物をするなんて、何年ぶりだろう。当然のように美奈子は大喜びで、その姿を見ながら信彦も、そんな自分に満足していた。

「あら、ありがとう。よくわかったわね、私がハートのデザイン好きだって」「そりゃわかるさ、いつも諒子はハートのペンダントをしてるじゃないか」お誕生日に信彦からティファニーのペンダントを贈られた。その時諒子は言った。「お願いがあるの」「なに？」「あのね、同じものを奥さんにも買ってあげてほしいの」「どうして？」「理由？それはきっと・・・フェアじゃないから・・かな。ね、お願い」どうしてそんなことを言ったのか、本当は諒子にもよくわからなかった。なんとなく、ただなんとなく言ってしまった。（これも背伸びなのかな）言った後にとても後悔した。そして、奥さんを愛する信彦に嫉妬した。

いつかは壊れてしまうかもしれない二人の関係。とても不安定で、何の保証もない。せつなくてはかない桜の花のような二人。でも、二人はとても幸せだった。多くを望まず、相手を許せる究極の愛情。お互いを思いやり、優しい関係。夫にも、妻にも、そして、最愛なる恋人にも・・・そんな毎日が繰り返される。

二人が出逢ったあのときから、周りの景色がとてもきれいに見えるようになった。何一つ変わったものなどない。実際には、何も変わっていないのだ。ただ、きらきらとしたきれいな春の光だけが、手を繋いだ二人の上に、優しくそっと降り注いでいた。

第8話　春のとき（後書き）

主人公の諒子と信彦は、私の憧れです。幸せな「春のとき」どうか皆さんにも訪れますように・・・

最後まで読んでいただきまして、ありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0303a/

春のとき

2010年10月9日07時17分発行